

研究課題: G ボールを用いた幼児運動能力テストの開発に関する試み

研究代表者: 三宅 良輔

幼児期の体力や運動能力を把握する手段として、現在、文部科学省の幼児運動能力調査を実施する方法がある。しかし実施には多くの時間や人的労力を費やし、測定における道具などを揃える必要があることから、もっと簡易的に幼児の運動能力を把握できるテストの開発が望まれている。そこで本研究は、群馬県草津町で行われている就学前の 5 歳児健診に参加する幼児を対象に、G ボールを用いた「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」など全身の身のこなし運動能力および認知的能力を主とした運動能力テストを開発することを目的とした。

本研究の調査対象は5歳児運動検診に参加した 19 名(男児 12 名、女児 7 名)。①外遊びに関するアンケート調査、②文部科学省幼児運動能力調査(25m 走、テニスボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、体支持持続時間、後方ハイハイ走(この種目は神奈川県教育委員会幼児運動能力測定から))、③ G ボール幼児運動能力テスト(座位片足上げバランス、(バランス能力)、仰臥体支持持続時間(体幹を締める能力)、左・右・両手ドリブル(リズム感・道具の操作性)、10m ドリブル走り(複合的な運動能力))、④眼球運動テストを実施し、測定結果より以下のことが明らかになった。

- 1) 外遊びをととても積極的にを行う群において、文部科学省幼児運動能力調査の 25m 走、テニスボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、後方ハイハイ走において、高い値を示す傾向がみられた。ボール遊びや園庭を走り回るなど、日頃の運動遊びの繰り返し体験を通して、基本的な身のこなしや動作を発達させ、「走・跳・投」の動作を体得させたと推察された。
- 2) G ボール幼児運動能力テストにおいて、座位片足上げバランステストにて左右差があることが認められ、また右手ドリブルテストにおいて積極的に外遊びをする群で高い値を示したことがわかった。日頃の身のこなし動作として、利き腕や利き足を中心とした動作が多いことから、積極的に外遊びをする群において片足立ちでのバランス調整や利き腕での道具を操るドリブル運動が上手に行われたのだと考えられた。
- 3) 眼球運動テストと運動能力の関係性をみたところ、文部科学省幼児運動能力調査の体支持持続時間、G ボール幼児運動能力テストの両手ドリブルにおいて、眼球運動がしっかりとできる園児群に有意な差が認められた。しかし、全体をみると大きな差が認められなかった。
- 4) 文部科学省幼児運動能力調査と本研究にて開発を試みている G ボール幼児運動能力テストの間には相関がみられなかった。

本研究では、G ボールを用いた幼児運動能力テストの開発を試みたが、文部科学省幼児運動能力調査との相関が認められず、眼球運動テストとの明確な関連もみられなかった。この原因として被験者数が少なかったこと、すべての被験者が G ボール運動をするのが初めての体験であったことなどが影響したと考えられる。しかし、G ボールの持つ「転がる」「弾む」「不安定性」などの特性を利用した運動テストは、幼児の持つ「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」を把握するテストとして、G ボールはとても魅力的な可能性がある道具であると考えられる。今後もさらに調査データ数を増やし、研究を継続して行きたい。